

2014年7月27日主日礼拝説教(要約)

聖書 創世記 11章 27～12章 3節

説教「テラー族の旅立」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

アブラハムは、天地を創造された神を仰ぐ信仰者にとって、昔も今も信仰の父として覚えられる人物です。日本ではそれほど感じないかもしれませんが、世界的有名人といってもよいでしょう。そのアブラハムの信仰の旅の出発が、創世記 11章 27節から 12章 9節に語られています。11章の末尾から 12章の出だしにかけての箇所は、創世記の前半と後半のちょうど繋ぎ目となっています。

前半というのは、天地創造からはじまって、エデンの園の話、カインとアベルの話、ノアの洪水の話、バベルの塔の話と続きますが、これらは神の民イスラエルの歴史というよりも、人類一般の話、つまり世界というのはこのようにして生まれ、人間というのはこのような存在なのだということを物語っている部分です。「原初史」と呼ばれますが、神話的な物語で綴られているところです。

しかし、12章から聖書の記述は、ある特定の人物とその家族の歩みに絞られていきます。紀元前 18～19世紀頃、メソポタミヤ地方から今のパレスティナ地方に移り住んだ一族のことに焦点が絞られていきます。アブラハム、イサク、ヤコブと続く族長たちの話です。そして、ヤコブにやがてイスラエルという名前が与えられ、そこから神の選びの民イスラエル 12部族が生まれたと言われるのです。このアブラハムの物語の背景となり、前提となっているのが、アブラハムの父テラー族の旅立ちの箇所です。アブラハムの物語はすべて「テラの系図」(11:27)の中に位置づけられているのです。

さて、テラー族の系図は、すぐ前にあるセムの系図と読み比べてみると、ずいぶん様子が違います。セムの系図で繰り返されている言葉は、「だれそれが生まれ、だれそれは生まれた後〇〇年生きて、息子や娘をもうけた」というものです。生命の誕生と広がりが書かれています。子孫繁栄のさまが記されています。その系譜の中にテラが生まれ、テラからアブラム、ナホル、ハランという子どもが生まれるのです。

ところが、テラの系図に入ると、息子のハランが父より先に死んだと語られ(11:28)、その出来事が影響したのかどうかは分かりませんが、テラはウルという町から、ユーフラテス川を遡って、約千キロ上流のハランという町に移り住み、そこで生涯を終えて死ぬのです(11:32)。そして、テラと一緒に旅に出たのは、息子アブラムと死んだハランの息子のロトとアブラムの妻であるサライですが、このサライは、「不妊の女で、子供ができなかった」とあります(11:30)。つまり、テラと一緒に出発したのは、子どももない中高年の夫婦と親のいない独身の青年です。ここに描かれているのは、未来の夢を描きにくい一族の姿です。子孫繁栄の系図ではなく、いわば少子高齢社会の系図です。

しかし、まさにそのような中で、アブラハムは神の命令と約束の声を聞くことになるのです。「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める。祝福の源となるように・・・」。神のご意志と祝福は、信仰によって生きるアブラハムを通して波紋のように世界に広がっていくのです。神はこんな一族を選ばれ、彼らを通して、ご自身の御心を示していかれるのです。無きに等しい者をあえて召し出される神のご計画の不思議さがここに 있습니다。

アブラハムは、ちょうどペトロやヤコブやヨハネが、あるいは徴税人レビが、主イエスの「わたしに従って来なさい」という言葉に従って一切を捨てて従ったように、主のみ声を聞いたとき、父テラを後に残してハランの町からカナン地方に向かって出発したのです。彼は主なる神からの召しを聴き取り、主の召しに対して「行く先も知らずに」（ヘブライ 13：8）応答し、決断するのです。

けれども、私たちはアブラハムの旅立ちがテラ一族のカルデアのウルからの出発という流れの中で起こっていることを忘れるわけにはいきません。ウルは当時栄えていたメソポタミア文明の中心地でした。しかし、テラは人々がそこに集まってくるのとは違って、そこを出てカナンの地を目指したのです。当時の人々の人口移動の方向とは逆方向です。なぜ、テラはウルを出る決断をしたのか、なぜテラはカナンを目指したのか、それらについて聖書は何も書いていませんが、そこには不思議で力強い神の促しとご計画があったのでしょうか。テラのウルからの出発なくしてアブラハムのハランからの出発はありませんでした。

テラの大いなる旅成ちは、どういふわけか途中のハランまで来て終わります。そこからはまた新たに神のみ声を聞いたアブラハムが、テラの最初の志を引き継いで旅を再開するのです。その意味において、テラの旅は途中まででしたが、決して虚しいものではありませんでした。テラはアブラハム夫妻を連れて旅立ったことにおいて、神のご計画の中で大切な役割を果たしたのでした。

私たちの信仰生活を考えるとき、神の遠大なご計画を思ふよりも、自分が何ができたか、どれだけできたかと、目に見える成果ばかりを気にすることが多いのではないのでしょうか。そしてまた、何か少しでも目に見える成果らしきものがあれば、私たちはすぐにそれを自分の手柄のように誇りたくなるのです。しかし、私たちは、目に見えないものをこそ大切に、人間の力が尽き、私たちの労苦が無駄になったかと思えるところで進められていく神の御業を信じ抜く者たちでありたいと思ひます。私たちの未完成の業、中途半端な業を用いて、私たちの思いを超えたご計画を進めてくださる神に望みをおいて、信仰の旅を続けていきたいものです。 （7月27日主日礼拝の説教から）